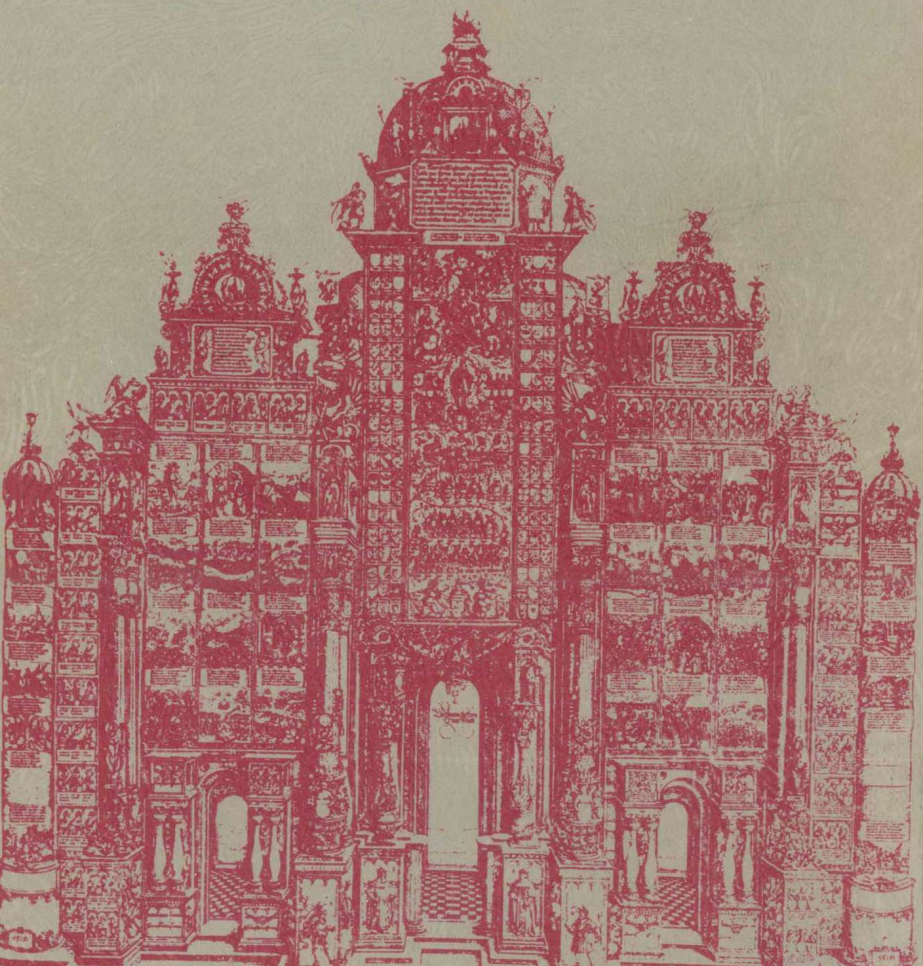
久生十蘭全集

III



久生十蘭全集 III

編集委員　大佛次郎　荒　正人
安部公房　中井英夫

三一書房

久生十蘭全集　Ⅲ
一九七〇年二月二十八日　第一版第一刷発行
一九七四年四月三十日　第一版第二刷発行
編　者　大佛次郎・荒　正人・安部公房・中井英夫
©　久生幸子　一九七〇年
発行者　竹村　一
発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京(二九一)三一三一～五番
振替東京八四一六〇番
郵便番号一〇一
印刷　文栄印刷株式会社　製本株式会社鈴木製本所
（第三回配本）

0393-701803-2726

目

次

だいこん　7
ノア　154
三界万霊塔　230

ノンフィクション・ノベル

カストリ侯実録　251
フランス伯N・B　265
淪落の皇女の覚書　280

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

妖婦アリス芸談　305
南極記　332
泡沫の記　348
海難記　360
青髯二百八十三人の妻　385
悪の花束　398
解説　中井英夫　421

久生十蘭全集　Ⅲ

だいこん

十五日　水曜

どこかで道草を食っていた最後のB29が一機、海よりも青い空の中をクラゲのように泳ぎながらゆるゆるとサイパンのほうへ帰って行った。

アンデルセンなら、お得意の童話の擬人法で、〈戦争……それは最後の装甲を解き、おのがベッドへ寝に行った〉とでも書くところだろう。

日本は降参した。とうとう奇蹟は起きなかった。

一夜のうちに大西洋の底へ沈んだアトランティド大陸のように、連合国がみなスッポリ海へ沈んで無くなってしまえと熱烈に期待していたが、駄目だった。芝生にふりそそぐ陽の光も、木の上を通る風の色も、なんの変りもないように見えるけど、これでもう今朝までのものとはちがう〈何物か〉なんだ。

それにしてもなんというすッとぼけた晴れようなんだろう。五年前の六月、フランスが降参した日もちょうどこんないいお天気で、〈空はあくまでも澄み、空気はさわやかで、このときほど美しい巴里はかつてなかった〉となにかの本に書いてあった。統計歴史学のお説だと、大きな国が倒れたり英雄が死んだりする日は、たいてい天気がよかったそうだから、その点では文句もいえない。

庭境いの夾竹桃の下で、ルルがごろごろ身体をころがしたり自分の尻尾にじゃれついてグルグル廻ったりしている。いかにもあそんでもらいたそうなようすだ。ご放送がすんでからママのおつきあいをしてロッキングに掛けていたが、べつに面白いこともない。クラブへ行ってみようとそっと立ちあがると、すかさずママがたずねた。

「どこへいらっしゃるんです」

「ちょっとクラブへ」

「クラブになにがあるんですか」

「なにがあるか、行ってみないとわかりませんのですけど」

「あなたはどうしてそうジタバタするんです。今日ぐらいは落着いていられないんですか」

うちの賢夫人は丑年生れの大人物で、覚悟をきめて坐りだしたら、背筋をおッ立てたまま、まる一日でも動かずに坐っていることができる。娘時代はひどい物臭さで、お琴も、お花も、ピアノも、手芸もうるさいことは一切やらず、

一日中、居間でしんとおしずまりになっていた。パパは懶惰の美とでもいうようなのろのろの魅力にひっかかって結婚を申し込んだが、コセコセした才女型が外交官のお嫁さんの定型だった時代なので、法王庁におけるルーテルのように各方面から非常なヒンシュクをかったということだ。

パパ説では、妻君というものは、いるようないないような、たとえば雨とか虹とか、そういう自然現象のように、なんとなくまわりにトーヨー（たゆたい、漂うこと）しているのが理想なんだそうだが、新婚早々、二人で旅行したとき、汽車が東京駅を出て神戸へ着くまで、ママが姿勢を崩さずに悠然と坐っていたのにはおどろいて、こいつは馬鹿でないのかと心配したそうだ。

ところであたしは申年生れの小人物で、天気のいい日には先祖の原始感情がめざめ、枝から枝へ伝って歩きたいような衝動に駆られ、お尻がむずむずして椅子になんか落着いていられない。下手に無理をすると、血の中の先祖の猿が腹をたてて、おれをどうするんだ、おれを。キャッキャッと金切り声をたてながら身体じゅうをくすぐる。

猿は牛とちがう。牛のようにやれといったってやれるわけはない。それに満寿子さんの〈あの方〉と〈和平工作〉と〈アメリカ〉の三角関係がどう解決したか気にかかる。

「ともかくちょっと行ってきます。用事を思いだした」

あたしのいうことなんかてんで問題にしない顔でママがいった。

「あなたは今朝もいらしたでしょう。今日はもういいにしておきなさい。戦争が終ったからって、すぐ解放されたような気になって、フラフラ遊びまわったりするのは利巧なひとのすることではありません。ママは反対よ」

「その点なら同感ですよ、ママ」

「これから先きどうなるのか、調印式がすむまではまだまだたいへんなんですから、もうすこししっかりしていただきたいですね」

「かしこまりました、夫人さま」

「ふざけるのはいい加減にしておきなさい。あなたっていったいどういうひとなんでしょう。こんな特別な日に平気な顔でいられるというのは」

平気な顔ってどんな顔のことか知らないけど、あたしの顔は生れつきこんなベティさんみたいな顔なんだ。頭の鉢はうんとおっぴらき、眼はびっくりしたようにキョロリとし、鼻は孫の手みたいにしゃくれている。おかあいらしいなんていってくれるひともあるけど、それはフロイドのれいの〈言いちがい〉というやつで、じつのところは〈変っている〉というつもりだったのにちがいない。夕陽があたると、火がついて燃えあがるかと思わせるかのふしぎな赤毛は、年頃になるとすこし下火になったが、脛のほうは時代とともに太くなって、どう見てもスラリとしていますなんていえない。

顔も、腓らッぱぎも、どこもここものんびりしていて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こんなパテティックな日には向かないとんまな出来なもんだからとかく誤解を受けて損をするが、平気がケロリという意味なら、あたしにもすこしいうことがある。

日本人がじぶんの国の敗けたことばかりいっていると、中国やフィリッピンに笑われるそうだ。これについてはトーマス・マンがうまいことをいっている。〈独逸人はじぶんの国が敗けたことに病的な誇りをもっている。破滅させた他国民の惨状は知らぬ顔で、ひたすらじぶんの悲劇に陶酔している〉って。

あたしたちは民族全体としての大きな不幸に逢ったことがなかった。ノルマン人に征服された英国人の苦しみも、プロシャに負けたフランス人の怒りも、いくども亡国の民になったポーランド人の絶望も経験していない。細長い平和な国にのんびり生きてきたので、戦争に敗けた悲しさなどは、いまのところまだ感じることも理解することもできない。つまりママのいう〈平気な顔〉なんだが、これでもママなんかの知らないところでポタポタ涙を流している場所が一カ所あるんだ。

「こんな顔も困ったもんだね。日本が敗けたというのに、馬鹿みたいに笑っているんだ」

ママはなにもいわずにだまって庭をながめだした。ママの日常はつかまえどころがないほど大きく、怒っていると きでもふだんの顔とちがわないので油断していると、だしぬけに手が伸びてきて、襟がみをつかんで猫吊しにしたりする。しずまりかえっているようでも、なにが飛びだすかわからないのでうっかりしていられない。そろそろと椅子をずらして広縁の端でようすをうかがっていたが、いっこうなにもはじまらない。いくらなんでも静かすぎるのでのぞいてみたら、ママは庭へ顔を向けたままスヤスヤとおしずまりになっていた。

まったく無理もないというところだ。昨夜の〈宮城占領事件〉で、パパもママもあたしもとうとうまんじりともしなかった。戦争は二月に終るといったり、四月だといったり、五月、六月、七月、八月と毎月のように予言がでた。この二月以来、パパもママもただの一日も人間らしい寝かたをしていない。

七月二十一日の桑港放送が、〈条件は無条件降伏でも、取扱いは日本の抵抗期間の長さによって決定されるだろう〉という意味深長な放送をしたというので、あまり強がりをいっていると、せっかくの〈手加減〉をだめにしてしまいはしないかと、あたしのような子供まで毎日おろおろしていた。

十日の午後、〈女子挺身隊第一号〉……前関白総理大臣ドオショオ閣下の〝みっともないお嬢さん〟の一の乾分、桜会の咲子さんが厳粛な顔でやってきた。

「今朝の午前三時に終戦の御前会議がおわりました」

あたしは気のない顔でいった。

「また終戦か。これでもう二十六回目だ。その話なら聞き

あきたよ」

「こんどこそほんとうなの。それで今夜の十二時にラジオで降伏の申入れをするんですけど、もう手遅れなんです。連合国は日本国民を抹殺することに相談をきめて、〈抹殺宣言〉の原子爆弾を今夜の八時から十時までの間に世田谷へ落すんだって。次の汽車で長崎へ逃げましょう。切符は買ってあります」

すごいことになったもんだ。あたしがおおあわてにたずねた。

「たいへんだ。長崎へ行って、それからさきどこへ逃げるの」

なにがお気にさわったのか、桜会はだしぬけに怒りだして、

「失礼ね。あなたみたいな馬鹿なひと、原子爆弾でふッ飛ばされてしまうといいわ」

とプンプンしながら帰って行った。

桜会の咲子さまは、池の魚のあばれかたで丹那の地震を言いあてた地震学者のお嬢さんだから、また鯰のご神託でも受けたのだろうが、どこに手ちがいがあったのかその日は空襲さえお休みで、ひと晩じゅう耳鳴りがするほどしずかだった。

フランスが独逸と伊太利へ休戦の申し入れをした六月十七日の放送で、八十一歳のペタン老首相が〈戦争をやめるようにつとめてみなくてはならない〉というべきところを、原稿の tenter de（つとめてみる）という言葉を読みおとして〈戦争をやめなくてはならない〉と放送したので、孤立した陣地で英雄的な抵抗をしていた全フランス軍は、涙をのんでいっせいに降伏してしまった。政府はあわてて、〈フランスの全軍に告ぐ。ちょっと待ってくれ。休戦の申入れをしてみてみただけで、戦争は終ったのではない。早まって降参なんかしてはいけないんだ〉と訂正の放送をしたが、そのときはもうあとの祭りだった。

ペタン首相が〈涙で眼が曇って字がよく見えなかった〉と弁解したら、ド・ゴールが〈たぶんお齢のせいでしょう〉とロンドンから憎まれ口をきいたが、フランスはいいところで手をうったので名誉だけは救われた。六月二十五日の〈国民に告げる言葉〉で、政府の自由はなお残り、フランスはフランス人のみによって行政されるだろうといっていたのが記憶に残っている。

貫太郎さんはペタン首相より六つも若いから、読みちがいなんかするはずはないが、日本はギリギリまでやってしまったので、フランスのようにはいかない。たぶんひどくみじめなことになるのだろう。あたしたちが心配していたのは、こういうディクティテッド・ピースになることだった。日本がポーランドのように負けっぱなしになって、日本人が旅券なしで世界中の貧民窟をうろつきまわらずにすむように、戦争継続派の頭に、このへんで切りあげるほうが利巧だという霊感のようなものがひらめいてくれないも

のかと、そればっかり祈っていたが、日本が早く降参すればいいなどと、ただのいちどもかんがえたことがなかった。

昭和十八年に日本へ帰ってきたその日から今日まで、あたしたちは一日の休みもなく戦争に協力した。一年半のあいだ、寝るにも起きるにもスラックスをぬいだことがなかった。男女国民総出陣の〈義勇隊兵役法案〉が通過したときも、草掻きの熊手で海兵隊とやりあうチャンスにめぐまれることも、すこしもおそれていなかった。

四代目クラブのクラブ・ハウスとあたしの家のある谷のうしろの台地は、べたいちめんに高射砲陣地で、射ちあげるたびに船酔いするくらい家が揺れ、雨やアラレと落ちてくる砲弾の破片で屋根瓦は一枚のこらず撃墜され、天井のスタッコは全員玉砕してしまった。陣地から立ち退けとうるさくいってきたが、パパも四代目クラブも一億総逃亡式の疎開に腹をたてていたので、なんといわれてもがんばって動かなかった。

四代目クラブのオール・ウェーブは早やばやと憲兵が持って行ってしまった。パパの書斎にあるやつは古びたりといえども〈トゥ・フランス〉型の六球だからカスカスぐらいには入るだろう。ドオショオ閣下の有名な〈法律第四十九号〉によって、一般市民がみだりに海外放送をきくと国防保安法違反で憲兵隊へひっぱられることになっているが、まだいちども敗けたことのない土つかずの日本が、どんな凛々しい休戦申し入れをするか、世界史のこの偉大な一頁は、どうしたって聞きのがせない。十一時すぎにうちの賢夫人がおしずまりになったので、子供芝居の悪漢の登場のようにヴァイオリンの震音つきで、ぬき足しのび足でパパの書斎へ忍びこんだ。

なんだかしらないけどぞっとするほどすごいんだ。このほうが面白くなってラジオなんかどうでもよくなったが、それでは国民の信義に欠けると思って、ダイヤルをひねくりまわすうちに、空の高いところをサラサラとわたって行く秋風のようなわびしい音が流れだしてきた。

セットの横っ腹に耳をつけると、〈戦争〉とか〈惨禍〉とか〈終止させることを〉とか、そんな言葉が風に吹きちぎられる酔っぱらいの歌声のようにとぎれとぎれにひびいてくる。虫の声もきこえないしんとした夜ふけに、ほそぼそとした白鳥の歌を傍受していると、日本がかあいそうになってきて涙がでた。

十一日の朝、広島へ現地視察に行ってきた理研のRさんが、クラブの朝食会で原子爆弾のすごさや広島のアビ叫カンの惨状について自由講話をしたあとで、ヴェランダでみなとお茶を飲みながら呆れ顔でいった。

「ピカッと光った一瞬に、第二総軍だけで戦死が八万に戦傷が二十万……日露戦争の二年間の全損害より多い犠牲者を出しているのに、新爆弾おそるるに足らずなどと強がりをいっています。いくら説明しても原子爆弾だと認めよう

としないんですからね」

村井の陸さんがいった。

「畑なんて野郎は、最近、宮中にだいぶモヤモヤした空気があるようだが、新型爆弾のことを心配しているのなら、おれが出かけて行ってあくまでも頑張らせるなんてバカな気炎をあげているそうじゃないか」

「そうなんですよ。あの翌日、九州の第十四方面軍と大阪の第十五方面軍の司令官を広島へ呼んで、本土上陸にたいする作戦会議をやっているというんだから僕もやられた。人間というものはどこまでバカになれるかという、動物試験のデータを見せられているようでつくづく無常を感じました。こういう進行状態では原子爆弾（アー・ボー）の東京訪問は必至ですね。観念するほかないです」

十二日は一日じゅうサイレンも爆音もきかなかった。日本はアメリカに忘れられてしまったのではないかというような印象をうけ、そうだったらずいぶんうれしいとよろこんでいたら、十三日は朝の五時から夕方の五時まで、アメリカ空軍の現有勢力がみな引っ越してきたかと思われるような空中大ページェントの統演で、休戦の夢なんかどこかへふッ飛んでしまった。

情けなくなってクラブへ出かけて行くと、六右衛門さんと長謙さんと満寿子さんが、K公爵の秘書のHさんとヴェランダで話していた。今朝早くスイス政府経由で連合国側の正式回答を接受したが、そのうちの第一項と第四項が問題になって、無条件受諾と受諾拒絶に意見がわかれ、午後の閣議も結論がでないままで散会した。いま外相が両総長と逢っているが、あいかわらず意見が対立し、和平ののぞみがなくなったというようなことだった。

三十分ほどするとN新聞のTさんから、閣議中から陸軍部内に動揺の色が見えていたが、クウ・デタによる和平阻止の策動が露骨になり、四時ごろ阿南陸相をだしぬいて〈軍は全面戦争を決議せり〉という大本営発表をしようとした。このほうは間一髪というあぶないところでおさえたが、〈バドリオを倒せ〉という抗戦デモのビラをさかんに撒き、さっき外相官邸へ手榴弾を投げこんだものがあるといってきた。

六時ごろ、長謙さんが電話へ立って行ったが、緊張した顔で帰ってきた。

「いよいよ東京へ原爆が来るか。短波で傍受したところでは、回答にたいする日本側の意志表示が遅れているので、留保の裏になにか企図がひそんでいるんじゃないかというので、連合国側の態度がひどく硬化してきたというんだ。艦隊が房総沖に待機していて明日の朝までに日本側の通報がないと、東京総攻撃を開始するというようなニュースまで入っているそうだ」

満寿子さんがいつになく高い声でいった。

「結局のところ、アメリカは目本民族を抹殺してしまうつもりなのね」

長謙さんがびっくりしたようにいった。
「まさかそんなこともないだろうけど」
「いいえ、そうなのよ。主権の問題にしたってそうでしょう。〈ポツダム宣言には、天皇の国家統治の大権を変更する要求を含んでいないという了解のもとに〉という留保条件をつけて受諾したのに、それについてはなんの挨拶もないじゃありませんか。日本政府の形態は、日本国民の自由に表明する意志によって決定されるという第四項なんかは、あの方の主権を否定する肚だということがありありと見えすいているわ」
長謙さんが困ったようにボソボソいった。「でもね、〈天皇の主権は連合軍最高司令官の指揮のもとにおかれる〉と、ことさら〈天皇の主権〉という言葉をつかっているのは、言外にあの方の地位を承認していることを匂わせているんだ。はじめから否定する意志なら、どんなことがあってもそんな不用意な言いかたはしない。心配しないでもだいじょうぶだよ」
六右衛門さんがあとをひきとっていった。「九日の夜の御前会議で、あの方が伝統的な天皇の権限を越えて降伏を要求されず、気ちがいの軍部の督戦で、殺されたくない恐怖から、四百万の軍隊が最後の洞穴やギリギリの山奥にたてこもって死にものぐるいに抗戦をつづけたら、連合軍は硫黄島や沖縄以上の死傷者をださなくちゃならない。だからあの方の勇気と決断がどんなに多くの人命を救うことになったか、そのへんのことは連合国のほうがよく知っているよ。いまの日本には大統領になれるような大政治家がいない。天皇制を否定すれば、どこでおさまるか見当のつかないことになるが、そこまでの混乱を望んでいるとは思えない。もっともアメリカ以外にそういう国があることは否定しないが」
満寿子さんはすごい蒼い顔で庭の花むらをながめながらいった。
「なにを考えてIRC（万国赤十字）の仕事なんか手伝っていたのか気がしれない。これじゃ死んでも死にきれないわ」
パパも、ママも、四代目クラブも、おチビさんも、あたしも……わけのわからない赤ん坊と〈赤いひと〉を除いた日本人全体が、いまなにより心配しているのは連合国ああの方をどういう取扱いするかということだ。
ヨーロッパにいるあいだじゅう、あたしたちは集まるたびにあの方のお話ばかりしていた。日本の前途が暗く見えだすとき、あの方がいられることを思うとすぐ希望が戻ってきた。
フランスの人民戦線の行動隊と、ソルボンヌ大学の〈王の親衛隊〉の突撃隊がコンコルドの広場で衝突した二月六日の壮烈な市街戦を、あたしたち（あたし、六右衛門さん、長謙さん、珠子さん、満寿子さん、島野の鶴一さん）は聖フロランタンとリュウ・ド・リヴォリが出あう角のグ

ルネルさんの四階の窓から見ていた。

ユトリロの巴里の雪景色にそっくりなコンコルドの雪を血に染めながら、ソルボンヌの大学生がコムミュニストの行動隊と機関銃の射ちあいをしているあいだへ、騎馬巡査がニッケルのヘルメットを光らせながら突撃して来る。戦車が地ひびきをうたせて乗りこんでくる。戦争の局部を見ているようなすごい光景だった。この戦闘で大学生がたくさん死んだが、祖国のために進んで身を挺し見えない敵と戦っていたフランスの大学生の顔々がいまでもはっきりと眼にうかぶ。

あたしたちが〈王の親衛隊〉の百倍のまた百倍も……あらんかぎりの誠実と熱情をもってあの方を愛していることは、ツルゲネーフの言いかたを借りると、〈いかなる弁証法をもっても覆すことが〉できない。なにも満寿子さんにかぎったことではない。あたしにしたって一旦カンキュウあればいつなんどきでも蹴あいをする用意があるが、どうやら満寿子さんはすこしばかり見当ちがいなほうを睨んでいるようだ。

和平斡旋の頬かぶりや、こんどの参戦ぶりでもわかるように、あの方の主権を否定して日本をごたごたさせようとしているのは、じつはアメリカでなくて、アメリカよりだいぶ西寄りの、文明の平分線からウント北へあがった……ひとの領土を自分のほうへ引きつける力のある磁石を載せてフワフワ飛びまわるという「ガリヴァー旅行記」の〈飛ぶ島〉……これぞと思う国があると、飛行をとめてその上にいすわり、太陽と雨を遮って飢饉や疫病をおこして降参させる。それでもいうことをきかないと、ドスンとその国へ墜落して、家も人民もおし潰して全滅させるという、れいの〈飛ぶラピュタ国〉によく以たソピエタ国だくらいのことは、あたしのような子供にだってわかるんだけど、満寿子さんとアメリカの結びつきにはいうにいえぬむずかしいことがあるので、頭がこんがらかって、こんな単純なことさえ理解できなくなっているのらしい。すごく蒼い顔で考えこんでいるので、ことによったらことによるのでないかと心配になってきたが、他人にはどうしようもない問題なので、あたしとしてはなにもいわずにおいた。

八時ごろ家へ帰ると、ママが居間の長椅子で泰然とご読書をしていられた。ママぐらいの齢になると、この世になんの感激もなくなり、明日死ぬかもしれないということさえピンとひびいてこないんだ。むやみに腹がたってきて、大きな声でママにいった。

「あたしなんだか悲しくてしようがないんですから、そっとしておいていただきます。当分のあいだ、ご朝食に降りてきませんけど、どうかご心配なく」

本から眼もはなさずにママがいった。

「誰が心配なんかするもんですか。あなたこのごろすこし召しあがりすぎるようですから、すこしおひかえになるほうがいいわ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com